

サウジアラビア王国紀行

～ 4 つの時間 ～

小村幸二郎

入 国

数年前までは小さなプロペラ機が プルンプルンといかにも頼りなさそうな音をたてて ポンコツ寸前のボデーを引きずるようにして 飛びまわっていたアラビアの空に 現在は 巨大なジェット機が いかにも値段の高そうなキーンという音を残して 矢のように飛びまわっている。おまけに 色白で鼻がつんと高く 魅惑的な腫をもったグラマーの stewardesses が 素適なコバルトブルーのスーツと帽子を 品よく身につけて愛想をふりまくので 「ここは本当に世界の秘境といわれるアラビアだろうか？」と錯覚をおこしそうになる。

ふつうは機内で書かされる入国カードや税関申告書などは この国へ入る場合いには機内では渡されず 飛行機から降りて入国管理の所へ行く直前に渡され 混み合った所で書かされる。必要事項をちゃんと記入した入国カードと入国ビサをとってあるパスポートを揃え・入国管理官に提出すれば 滞り場所や勤務先などを質問される程度で 入国手続はむしろあつてなく終ってしまう。そして やれやれこれで一安心とたいていの人は思うだろうが そうは問屋がおろさない。税関検査という難関が大手をひろげて待ちかまえている。そして ここでは私たちの思いもおよばないものが槍玉にあげられる。多くの国では その国の人たちの生活に完全にとけこんでいる酒類は イスラム教の中でもっとも戒律のきびしいワハビ派に属するこの国では 売買することも飲むことも固く禁じられているので うっかりしてウイスキーでも持込もうものなら まず大目玉をくい へたをすると入国すらおぼつかなくなりかねない。しかし酒類マヤク 銃器 風紀上好ましくない物品等以外の物については 日本みたいに持込む物品に金額の制限があるわけではなし それほどうるさく問いつめられることもない。ただしカメラなどを化粧箱に入れたまま持ちこんだりすると多額の税金を課せられるおそれもある。数年前まではカメラや 8mm 撮影機等の持込みは許されなかったが 現在は自由で 町のカメラ屋でも売られている。

入国手続を終り 税関検査を無事に終って 空港警備の兵隊に出口のガラス戸の錠をあけてもらってはじめてこの国に入ることになるが はじめにこの国を訪ずれ

た人の多くは 一歩表へ出たとたん余りの暑さに仰天して 出口の所で客を待っている黄色のナンバープレートをつけたりっぱなタクシーにとび乗ることだろう。ところが ジェッダのタクシーの運ちゃんでも外国語を話せる者はまずいないので 在留邦人にも出迎えてもらえば別だけれども アラビア語を話せなければ自分の意志を相手に伝えることは中々むずかしい。でもアラビア人は割合におせっかいだから タクシーの運転手とガヤガヤやっていたら 1人位は英語を話せるのがやってきて 目的のホテルか場所へ行けるよう世話をやいてくれるかもしれない。

言葉の通じない土地の1人旅は スリルもあって結構面白い半面 案外に心細くそして疲れるものなので 夕方その土地に着いた時などは一日ぐらいいはゆっくり静養したいと思うのが普通だろうが この国に一般旅券で入国したばあいは 空港でいろいろの手続きや検査を終ったからといって 自由の身になったわけではない。というのは この国に入国したばあいは入国後48時間以内に入国登録をしなければならぬからである。もしこの手続きを怠ると いざ出国しようと思っても出国ビザ（これがないと出国出来ない）をもらうことが出来ないし 48時間以上過ぎてから手続きに行くと 義務を履行しなかったということで 多額の金を徴収されるので入国登録が終るまでは完全に自由の身にはならないことになっている。

出入国については以上の手続きの他 多くの国の場合と異なって 一般旅券で入国するものに限り入国税を支払わなければならない。多くの国では出国する場合に出国税とか空港税とかいった名目の税金（100～400円）を支払わされ入国の場合は不要であるが この国では出国税の代りといつては変だが 20リアル（1600円）の入国税を支払わされる。この国を離れる場合には出国ビザが必要なので 出国の日がだいたい決ったら 早目に出国ビザを取得しておくがよい。

4 つ の 時 間

面倒な手続きを終えて いよいよサウジアラビア王国での生活がはじまるわけであるが はじめてこの国を訪ずれた人が 日常生活の上で まずとまどうのは時刻についてであらう。こう書くといつての人は「時刻で

まごつくなんておかしいじゃないか。世界中どこへ行ったってその土地の時刻はローカルタイムと呼ばれるものに決っている」ときつというにちがいない。ところが事実だから仕方がない。「事實は小説より奇なり」「郷に入れば郷にしたがえ」という諺もあることだからまあこの後をよく読んでもらうより仕方がない。サウジアラビアという国に興味をもっている貴方はまさか

ここまで読んで この先を読むのはやめたとはいわないだろう。この国には4通りの時刻表示法がある。まず第1はグリニッチ標準時 これに3時間(半島のアラビア湾側では2時間の所もある)を加えたローカルタイム 日没を午前0時とするアラビックタイム これに6時間を加えたサントタイムの4つで この中で一番多く使われているのはアラビックタイムである。

何ととっても このアラビックタイムというしるものはそれに完全になれきったとしても 中々厄介である。なぜかという オテントウ様が毎日同じ時刻に出て同じ時刻に沈んでくれれば面倒なことも起こらないが 日の出 日の入は毎日異なるので 自分の時計をアラビックタイムに合わせて使おうと思ったら毎日1回か 少なくとも1週間に1度はは時計の針を調節しなければならぬからである。試みにジェッタで1年間にどの程度のずれがあるかを大ざっぱに統計をとってみたら 1時間以上の差があった。

アラビックタイムになれても 1カ所で生活している分にはそれほど痛痒を感じないが 国内のどこかへ旅行する場合には一層厄介である。何しろたいへんに広い国のことであるから 場所によっては当然日没の時刻は異なる。したがって たとえばジェッタで時報を聞いて 切角合せた時計も 旅行先でまた合せなければならない。

しかしこれも どちらかといえば几張面な日本人の場合のことで この国の人たちはそれほど気にならないらしい。時間をたずねても5分から10分単位でしか返事をしない人の多いのを見れば 多分 日没の時間が場所によって異なるという先入感があるような返事をさせるのであろう。実際に生活していると 時刻のことで起こる失敗が少なくないが よくなれないために起こりやすい失敗は人と合う約束をする場合である。たとえば「何時に合おう」と約束しても それが何時間の何時かははっきりしないし 自分の時計がローカルタイムで相手の時計がアラビックタイムだったりすると とんでもないことになる。それでこのような場合には 「何時間の何時」と約束するか 「これから何時間後」と約束するか またはお互に時計を見せあって「この時計で何時」という風に約束する必要がある。まあ この国で生活しようとする人は時刻表示法になれるまでには若干の期間を要するので ものぐさな人や物覚えのあまりよくない人は町の時計屋で文字板が2つ並んでいる腕時計を買って 1つをアラビックタイムに もう1つをローカルタイムにでも合せて常用する方が無難だろう。

変 化 形			基 本 形 数 字	
語尾にきた時	語中にきた時	語頭にきた時		
أُحْيَى	يُحْيِي	أُحْيِي	右から左へ読む	
أ	أ	أ	ザムハ	1
ب	ب	ب	フリア	2
ت	ت	ت	バ	3
ث	ث	ث	タ	4
ج	ج	ج	サ	5
ح	ح	ح	ムジ	6
خ	خ	خ	ハ	7
د	د	د	ルーダ	9
ذ	ذ	ذ	ルーザ	10
ر	ر	ر	ラ	11
ز	ز	ز	ザまなほ ニザ	12
س	س	س	ニス	13
ش	ش	ش	ンシ	14
ص	ص	ص	ドーサ	15
ض	ض	ض	トダ	16
ط	ط	ط	タ	17
ظ	ظ	ظ	ザ	18
ع	ع	ع	ニア	19
غ	غ	غ	ニガ	20
ف	ف	ف	アフ	21
ق	ق	ق	フカ	22
ك	ك	ك	フカ	23
ل	ل	ل	ルーラ	24
م	م	م	ルーミ	25
ن	ن	ن	ンヌ	26
ه	ه	ه	ハ	27
و	و	و	ウツ	28
ي	ي	ي	ヤ	29
ة			エタ ターブルマ	30

مَنْحَكَ	وَقَعَ	第23回 アラビア 文字
مَنْحَكَ	وَقَعَ	アラビア 単語の綴 り方の例 (右から 左へ書く)
カハナマ (貴方に与えた)	アカツ (落ちる)	

言葉と住民

ジエッダの空港に着いたとたんにもまるでケンカでもしているような口調の、カン高いアラビア語の会話を聞き、オーパーなジュスチュアに驚かされる。

現在使われているアラビア語は、地方によって大分異なり、アラビア半島、シリア、イラク、ヨルダン付近、アラブ連合およびその西部地域（モロッコ、アルジェリア等）の方言に大別される。そしてこれらの言葉は、イスラム教の聖典といわれているコーランに書かれている言葉とはかなり異なっている。

文字は28の子音文字よりなり、母音は特殊な記号によって表わされる（第23図）。文章は右から左へ横書きで、数字は独特の形をしているが、その読み方はドイツ語のそれに似ている。アラビア語の中には日本語に非常によく似たものがあるので、そういう言葉を聞くと何となく親しみを覚える。たとえばアンタ（エンタ）という言葉は日本語の貴方という意味であり、ナームはナーニ、アイワはハイ、ルカンダ（サウジアラビアではフンドク）は旅館といった具合である。

しかし、中には発音が全く同じで意味の全く異なるものがある。その代表的なものはゲイシャという言葉で、これは日本では芸者という意味であるが、アラビア語では軍隊を意味する。文字はその位置によって形が変わり、冠詞も次の単語によって変り、名詞自体も変るアラビア語は、おそらく世界でもっともむずかしい言葉の一つであろう。アラブ諸国を旅行しているとよく「イムシユアラール」という言葉を聞く。これは「神様の思召しがあれば」という意味であるが、普通は「多分ね」といった軽い意味で使われる。この言葉は、たいへん便利であると同時にものすごく不便でもある。確かに、行けるかどうか不明なのに「必ず明日行くよ」とか「絶対にに行くよ」などと約束しがちなのは、日本人の悪い癖の一つである。

暖かいフトンの中で心地よく寝ている所にさえ、どうかすると、自動車が何の前ぶれもなしにとび込んできたり、土砂が押寄せてきたりするご時勢の日本では、「絶対」などという約束が出来るはずもないのに、そのような空々しい約束をする。そこへいくとアラビア人は未来のことについては、「絶対」などという言葉を使わないで、必ず未来形のイムシユアラールを付け加えることを忘れない。

そういう点では確かに当を得ているが、この言葉も使えば、いよいよよっては腹立たしくなる。たとえば、急を要する用事が生じた場合、「これを1時間後に終らせてくれ」とか「この書類を明日までにちゃんとしてくれ」と

か頼むとたいていの場合「アイワ（ハイ）イムシユアラール」と返事をする。そしていつけた時間が来てから「何故やらなかったんだ」と怒ると「神様の思召しなかったから」と、いいかねない。しかし、ある町を訪ずれた折に、うす汚いなりをした男に「アテネ、パクシーシ（喜捨して下さい）」と手を出された時、「ボコライムシユアラール（神様の思召しがあれば明日ね）」と返事をしたところ、その男がもらうのをあきらめて行ってしまった時には全く痛快だった。しかし、もう1度その男に逢った時、「ボコライムシユアラール」が効力を発揮するかどうかは保証の限りではない。

この国の住民は、およそ600万人といわれているが、700万人あるいは1200万人ともいわれ、判然としなない。これは、住民の多くが不定着のベドウィンであるため、正確な人口調査を行なうことが困難なためである。しかし、1963年に実施された人口調査の結果は600万人と発表されている。この人口にもとづけば、この国の人口密度は3.8人/km²となり、日本の人口密度（252人/km²）の約1/60となる。

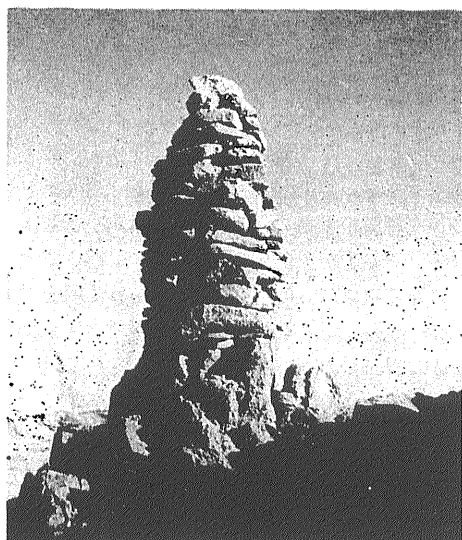
住民は、その生活様式によって一応、都市住民、定着農耕民、遊牧民に大別される。これらの中、都市住民は約150万人で全体の25%、定着農耕民は100万人で16.6%、遊牧民は350万人で58.4%を占めている。主要都市の人口を示せば、次の通りである。

リヤード	169,000 人
メッカ	159,000 人
ジエッダ	148,000 人
メデイナ	72,000 人

今からおおよそ40年前までのこの国は砂漠の民ベドウィンの世界であったといえよう。全人口のおおよそ60%を占めるベドウィンは、きびしい自然条件の下に、わずかばかりの緑を求めてさまよう牧羊生活にあけくれ、文明社会から遠くはなれて、それこそ飢餓とたたかい、貧困を強いられて生き、それがゆえに、時には旅人を襲う掠奪に明けくれ、また他部族との斗争にふけつていた。しかし、このような戦もアブドルアジーズのアラビア統一を機に次第に影をひそめ、現在は、治安上不安な地域は全くなくなっている。

この国を建設したアブドルアジーズ、イブン・サウド王は近代国家としての急速な発展をはかるため、まず人材を中近東諸国に広く求めた。そしてシリア、レバノン、イラク、イラン、トルコ、エジプト、パレスタイン等から優秀な学者や政治家が招かれ、これらの人々は、この国の新しい国造りに専心し、後にその大部分は帰化してサウジアラビア人となった。

その後、石油の産出が軌道にのりはじめると、中近東



第24図
ベドウインの
子供が作った
石の塔 (Al
Wajh 町東方
20km) 小高
い丘の頂や山
麓にはこのよ
うな石の塔や
家らしきもの
がしばしばみ
られる。こ
れはベドウ
インの子供がマ
マゴト遊びに
作ったもので
このような物
をじーっとみ
つめていると
安住する家を
構えず転々と
移動して生活
しているベド
ウインの子供
の家を持つあ
こがれを象徴
しているよう
で、じーんと
胸にひびく

以外の国からこの国へやってくる人も次第に多くなり
また メッカ巡礼の帰路そのままいついた人たちも少なく
なく 土着のセム族とこれらの人達とは次第に融和され
ていった。現在は外来者の血をひく人たちがかなり
多く ジェッダの町を歩いても まるで人種の展覧
会を見ているように感じられることさえある。それに
最近石油をはじめとする地下資源の開発 道路やビル
ディングの建設等のために世界各国から多くの外国人が
入ってきているので 一層 それに花を添えている。

これらの人々の中でアジア地域からきている人達はほ
とんど中国やインドネシア人で 町でこの人達と逢うと
何となく親しみをおぼえ声の一つもかけたくなる。

この国の人たちの対日感情はたいへんによく 私たち
が町を歩いていると ヤバナ(日本人) ヤバナといって
とても愛想がよく 時には紅茶やコココーラ等をご馳走
してくれる。そのもっとも大きな理由は 多分 日本

人は割合に気さくでいばらず その土地の言葉を早く
覚えて親しくしようとする事 この国に日本から輸入
されている物品を通じての日本人に対する畏敬の念 似
通った皮膚の色等であろうが 何と云っても日本がアラ
ブに対して侵略政策あるいはそれに類似の動きをかつて
したことがなかったことだろう。

こへの事情は イスラエルに対する物心両面での援助
あるいはそのいずれかを政策の中におりこんでいる国
は対するアラブの態度を見ても じゅうぶんに理解され
る。もつと分りやすく説明するならば アメリカの銀
幕に不動の地位を占め 世界一の美女とたわれるエリ
ザベステラー出演の映画が 彼女がユダヤ教徒になつ
たばかりに アラブ諸国では上映されがたいことによ
っても判る。

都市住民とは 定着農耕民および遊牧民以外の住
民のことで 主として商業に従事するか 官庁や役所な
どに勤務する人とその家族をさす。この中商業に従事
する者は 昔から「アラブの商人」などと呼ばれ 辣腕
ぶりで有名である。ジェッダの町の私たちの店の主人
に「アラビア商人はスゴ腕だと聞いているが どの程度
商売上手なのだ」と質問したところ その主人は 速座
に「日本商人の10,000倍 華僑の100倍だ」と返事を
した。まあ話半分としても アラビアの商人の商才が
相当なものであることは間違いなからう。

定着農耕民とは 住居を構えて 農業に従事す
る住民のことで その分布は 第14図に示したように
オアシス付近の農耕地に限られていると見てさしつかえ
ない。立地条件が農業にそれほど適しているわけでは
ないので一般に耕地面積はせまく 栽培される物にも限
度があり特定の人以外は 総体的に 生活水準は高いと



第25図
ベドウインのテント
(Wadi Zurybz) テントは
羊の毛を手織りで編んだも
ので 雨が少々降ってもも
らない 左から3人目奥
海 磯 小村 ベドウイン
の長 その弟 子供

はいえない。

遊牧民（ベドウィン）とは 家を構えず 家畜の羊やラクダをおって 転々と移動する生活を営んでいる人達をさし、中近東からアジアの一部にかけて住む遊牧民とほぼ同じような生活様式をもっているが 他どの国よりも自然条件がきびしいだけに その生活は決して楽ではない。しかし それだけに 他地方の遊牧民よりも規則正しく そして団結を固くして生活しているともいえよう。

水 水 明けてもくれてもこの地に生きる人々の夢は水につながる。そしてそれが乏しいばかりに 焼けた岩肌の山を 果てしなくうねる砂原をさまよわなければならない余りにも多くの人がある。古来から現在まで そしておそらく未来においても そのきびしい自然条件の下に生きなければならないであろうベドウィンの姿は 美しい自然の内ふところに抱かれて育った私たちの目には 儂いである。人間社会からまるで隔絶されたような砂漠地帯での長年にわたる生活は そこに生きる人々に 人の世のみにくさ わずらわしさ そしてうつろさを教え 人の力の遠くおよばぬ自然の命ずるままに生きることに喜びをさえおぼゆることを教えた。

ベドウィンとして生きる道。それは 必ずしも 貧しくそして人間性を欠くがゆえに止むを得ずたどらなければならない道ではなく むしろ自然の中に のびのびと 汚れを知らずに生きることの可能な数少ない道の一つかもしれない。

事実 ベドウィンの中に「住居を構えて定着した生活

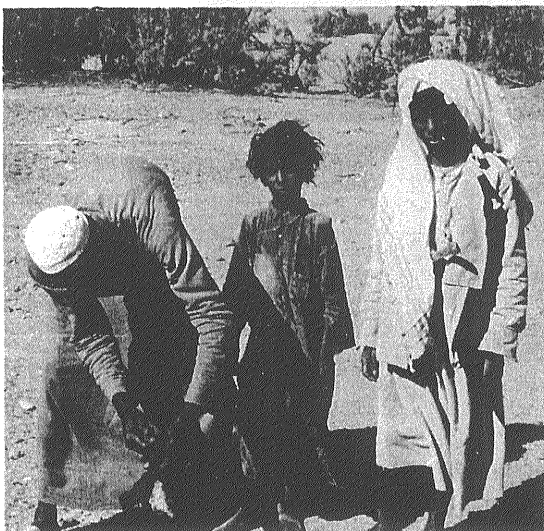
を営むのは人間本来の生き方にそむくものであり 自然に身をゆだねて生きることこそ人間の正しい生き方である」と考え 定住者に反感めいたものを抱いている者があながい多いのを見てもそのことが推察される。

しかし 見晴らしのよい小高い丘の上や 枝をひろげた木の近くにみられる 子供が石を積み重ねて造った石の塔（第24図）や家らしきものは何を意味するのだろうか。焼けきった石の上に坐し 無心に石を積みあげているあどけない子供の姿を想う時 私にはその石積みの塔がやはり石造りの家に住むことをねがう子供のあこがれの象徴のように思え 単念に積み重ねられた石を追う私の眼はこみあげてくる涙にくもりがちだった。

文明に恵まれた生活を営む私たちにとって いわゆるベドウィンの生活は一つの興味のまとである。彼等は羊の毛で織ったジュータン様のものを張ってテント生活をしながら（第25図）家畜を追って移動する。しかし彼等の移動は 意のおもむくままに行なわれるわけではなく 一人の指導者の指図によって 秩序正しく行なわれる。したがって家畜の餌の奪いあいや それに基因する騒動はまず起こらない。

トラブルが起こるとすれば ベドウィン以外の者に対する警戒心や他国者に対する異和感が一寸したきっかけで爆発した時ぐらいのものだろう。かつては 日常茶飯時のごとく 略奪にふけたベドウィンではあるが 現在はそうしたことはない。

私たちがキャンプしていた付近にも 時折 数家族のベドウィンが数日から2週間位テントを張っていて はじめの頃は中々なじめなかったが 何度も顔を合せたり水を分けてやったり（第26図）している中におたがいに



第26図 ベドウィンの男子（Wadi Miahz）フィールドからキャンプへ帰る私達の車を見つくと ベドウィンの男達が水をもらいに走ってくる。このような時 私達はよこんで水を与えたが こうしたことが彼等と親しくなる大きな原因の一つとなった



第27図 ベドウィンの女の子（Wadi Abu Maru）この女の子のように ベドウィンの女子は眼の所だけをだして 鼻から下を全部真黒の布でおおっている 真夏でも黒い布で全身をおおっているが なぜ黒を好むか判らない

打とけ 彼等のほとんど全部(女性以外)が 私たちの車を見かけると手をあげて声をかけ 「お茶を飲んでいて下さい」とさそってくれた。 ベドウインの成年男子は薪ひろい 水汲み(第28図) 食料の買出し 薪や家畜の売買等をおもな仕事とし 子供は家畜の世話をして一日を送るが 家畜を連れて歩く 婦人や娘(第27図)の近くを私たちが車で通ると ほとんど例外なく 彼女たちは脱兎の如くに山蔭や岩蔭に逃げてかくれる。 どうして逃げるのかいまだに判らないが おそらく 部族斗争 略奪はなやかなりし頃うえつけられた恐怖心がいまだに 彼女たちにそうしたことをさせるのであろう。

この国の住民について考える場合 私たちにとって 一番興味があるというか 探究心を起こさせるのはドレイについてであろう。 私たちが日常見る新聞や雑誌の記事 あるいは映画にすら この国にドレイ市場が現存すると報じられていることがあり この国で実際に生活して実状を熟知している人の憤激をかうことが少なくない。「鎖の大陸(原名は奴隷は生きている)」という映画の冒頭には「アフリカで買われたドレイは サウジアラビアのジェッダに上陸し 首都リヤードの市場で売買される」と説明されているが この映画ではジェッダ市の様子もリヤードも出てこない。 ましてリヤードにあるはずのドレイ市場なるものもみられない。 このことだけをみてもこの映画がサウジアラビアの実情をどの程度伝えているかが疑問である。 私たちは ドレイと聞くと 主人に鞭打たれながら 食う物も満足に与えられず 重労働を強いられて 息も絶え絶えに生きながらえている人たちの姿を想像しがちである。

世界中をくまなく探したら 多分 そうした人たちもいるかもしれない。 しかし サウジアラビアにはそのようなドレイは現存しないのである。 この国でいうドレイは イスラム教の憐れみの念より生じたもので 私たちが西欧式概念で考える 強制労働と飢餓の果にやせさらばえて死に絶えるドレイとは全く異なり ごく普通の使用人にすぎない。 したがって病気をすれば病院で治療を受け 衣食住も与えられ 生れ故郷であえぎながら生活していたであろう彼等にとっては この国でドレイになるということはむしろ安住の地を得たようなものである。 ドレイの子供で大臣になった人もあり また実業界で活躍している人たちがいることをみれば その生活環境もおのずから想像されよう。

もっとも 以前にドレイ売買が行なわれたことは事実らしい。 イスラム教徒にとって一生の願望であるメッカ巡礼を口実に 主としてアフリカ大陸から連れてこられた人たちが メッカ参拝後に ドレイとして売られたのもその1例である。

しかし1936年にドレイ輸入禁止令が発布され 1953年には人身売買が禁止される一方 政府は ドレイを使用している人達に賠償金を与えて 所有するドレイを解放させる措置をとった。 この時ドレイ所有者は 相応の金子を与えて解放したが それまで使用されていた解放者には 徒来通り使用してもらうことを強くのぞみ 使用者に懇願した者が少なくなかったということである。 このことからこの国におけるドレイの生活状態の一端がうかがわれる。

私たちはジェッダ(第29 30図)へ着いてしばらくの



第 28 図 a



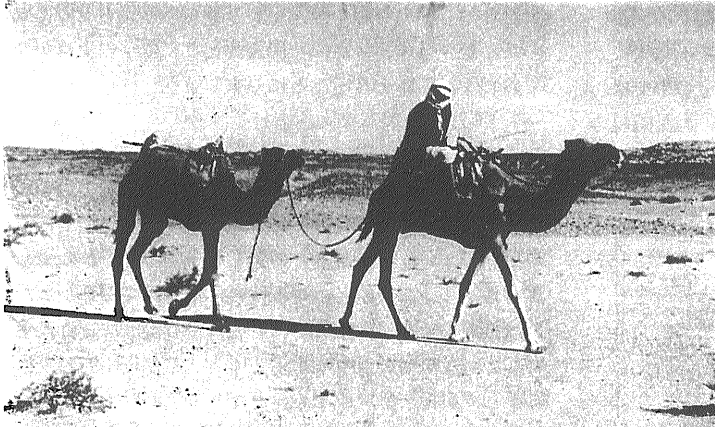
第28図 a・b
羊の皮で作った袋で水を汲むベドウインの男(a)と水袋(b)(Wadi Zurybz) 右の水を入れる袋は 羊の皮をきれいに削いだものをそのままつかっている 写真では下の方が首 その上方が前足

第 28 図 b

間 町を歩いている折に みすばらしい姿で通りがかりの人に金子を乞うアフリカ大陸からきている人達をみかけたが これらは 母国がイギリスやフランスの治下にあった頃 メッカ巡礼の片道キップをもってこの国へきた後 そのままいついた人たちであった。ところが 1964年の夏頃 この人達の姿は 全く突然に ジェッダの町から消えていった。

どうしたんだろうと不思議に思っていた私たちは 偶然に そのナヅをジェッダの空港で解くことが出来た。それは かつては西欧諸国の植民地であった母国が 新しい独立国として生れ サウジアラビア王国の援助を得て このような不遇の人々の引揚げを行なったからである。そして私たちが空港で見たものは 帰国の航空機を待つ 一群のこれらの人々であった。

15世紀の中葉 ポルトガルの皇太子エンリケが 黒人



第29図 Al Wajh の東方25kmのワジで逢ったベドウィン Al Wajh へ薪を売りに行つての帰りだが 自分のテントの位置をたずねても ニヤリと笑うだけでついに教えてくれなかった

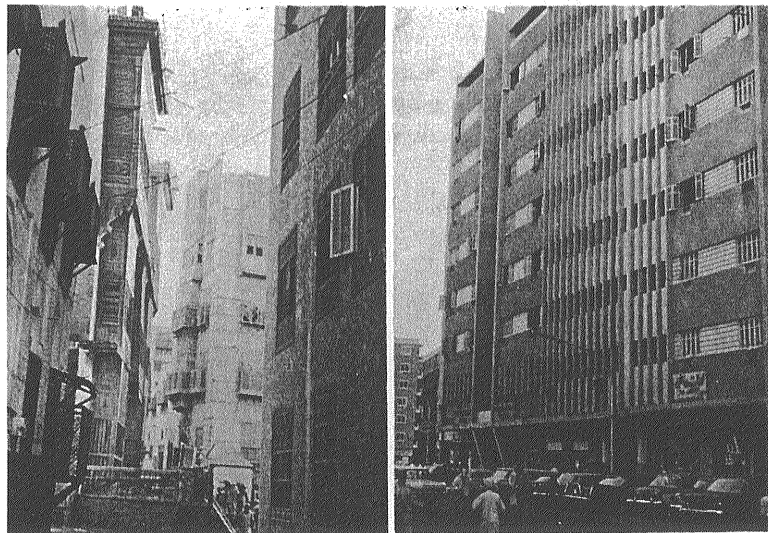
ドレイをヨーロッパへ連れていくべく イベリア半島に上陸させてから約400年を経て サウジアラビア王国においてはドレイ制度が廃棄されたわけである。

仮りに 金で売買され 好むと好まざるとにかかわらず 血のにじむような労働を強いられてむなしく生きる人をドレイと呼ぶならば 私たちの住む文明社会にも数えきれないほど多くのドレイがいるのではなからうか。毎日読む新聞 雑誌 ラジオやテレビのニュースで知る悲惨なそうした人たちが 事実 私たちの身近にもいるのである。自称文化国家 その中に生きる私たちは悲惨なそして厳シクその事実を アラブの人たちにどう説明したらいいのだろう。文化国家であるがゆえのゆがみか 何が原因しての恥部か 胸をはってありのままを異国の友に語れない辛さを味わせないでくれるものは一体何だろう。

(筆者は鉢床部 現在サウジアラビア王国へ出張中)



第30図 Al Wajh 町の東方80kmの谷で逢ったベドウィンの男 年令をたずねたら57才と答えた ホリの深い顔とヒタイにきざまれた深いシワが 生活のきびしさを表わしている しかし 柔和なこの男の顔からは苦しみは感じられない



第31図 Geddah の市街 (A)は典型的なアラブ建築が林立する旧市街 (B)は鉄筋コンクリートで造られたショッピングセンターのアパート(1階は一流品店)